統一ドイツのアイデンティティの問題
——亀裂の入った社会の課題——

佐　藤　裕　子

序

1989年11月9日，東西を隔てていた壁が崩壊した．凍てつく初冬の寒さと闇の中，壁を越えて西側の地に一歩を踏み出そうとする東ドイツ市民とそれに手を差し出す西ドイツ市民の姿は，不可能を可能にした小説より奇なる衝撃的な事実として世界中のメディアの電波を走った．爆発するようなエネルギーを含んだ空気の中，統一は当時ソビエト連邦ゴルバチョフ政権の動向を睨みながら，当時の誰もが想像したよりもはるかに早く成されていった．94年には一つになるだろうという噂が，92年になり，91年になり，実際にはすでに90年10月に統一を祝う歓喜の渦がブランデンブルク門を包んでいた．一方，その日ベルリンから遠く離れた西部ドイツの経済都市デュッセルドルフでは，人はまるで台風の目の中にいるかのような醒めた冷静さで事態を受け止めていた．この国にその後生まれ出てくる困難を予感したかのように．

壁の崩壊から5年が経過した現在，統合されたドイツ連邦共和国の社会は最近僅かに回復の兆しが見えてきたとは言え世界的不況の中にあって，東部ドイツ再建にかかる莫大な経済的負担，特に東部において顕著な青年層の失業率の高さ，市民の不満，外国人に対するテロ，無視することのできない極右政党の動向，基本法第16条の庇護権に関する改正にもかかわらず後を引く難民問題，東西の経済格差の問題，国民の意識の中での東西の亀裂，改革を迫られる産業界の構造など数々の困難な問題に直面している．このような状況下，表面化される社会問題と相互に関連しながらその根底に横たわるものとしてアイデンティティの問題があり，統一ドイツが直面した危機を切り抜ける重要な鍵として新たなアイデンティティ形成を

求める意見が，政治家・識者の間で起こっている．

そこで本稿では，現在ドイツが抱えるさまざまな社会問題と関連して存在するアイデンティティの問題を検討していきたい．

1　経済的負担と統一の歪み

東西ドイツ統一の重要な課題である東部ドイツの経済復興のために政府が背負い込んだ負担は西部ドイツ，東部ドイツ双方の市民に不満として影を落としている．東部ドイツ市民は統一がもたらすはずだった生活水準の向上が政府が公約した通りにもたらされなかったこと，そして目の当たりにされる旧西ドイツ市民との生活水準，及び同職種における給与の格差などが東での不満の要因である．また，各機関の上層部のポストが西部ドイツからの人材によって占められ，加えて東の市民は失業という社会主義体制下では全く存在しなかった事実に直面することとなった．世界的な不況のもと競争力のない旧東ドイツの産業は消滅し，また存続可能な場合も大幅な人員整理を迫られている．

かつて旧東ドイツではそれが西側の豊かさという概念からは離れているにせよ福祉は全ての市民に対して完全な形で存在していたが，今や彼らは全く新しい市場経済という環境の中で競争し，西側のノウハウを学び，生存していかなければならない．失業という状態は東西ドイツ統一の瞬間には東ドイツ市民は誰も頭に描きえなかったはずである．それどころか彼らが希望した生活とは正反対なものであろう．生活水準の格差に加えて，40年の空白期間（西側のパースペクティヴから見て），つまり1960年代から1989年までの間に西ドイツの社会，あるいは西側先進国の社会の多くがある類似性を持って経験した学生運動，平和運動，極左勢力のテロ，ヒッピー文化，反核，環境運動など，それら一連の社会が歩んできたプロセスを体験すること無くいきなり1990年の物質文明とそれを支える複雑な社会機構，産業システムの中に組み込まれたのである．西部ドイツからは統合後まもなく旧東ドイツの産業の非効率性やインフラの立ち遅れを目の当たりにして東部ドイツ人一般に対する偏見に満ちた判断が下されることも稀ではなかった．西部ドイツから使い物にならないと烙印を押されたのは旧東ドイツ製や旧ソ連製の機械ではなくて自分達だと感じ，やり場の無い

憤りを覚えたのは私たちにも理解できる感情である．また統一後の過渡期に東部ドイツの市民が専ら家電製品・車などの耐久消費財や洋服などを購入したり旅行したりして，かつての「もう一つのドイツ」を理解するための演劇・コンサート・本などの文化的な活動への出費は二の次にされたことも感情的なずれをさらに大きくした（まず身の回りの物から西側の水準に近づけたいという希望は非常に妥当なものである）．一方西部ドイツの一般市民から東の文化を理解しようとする態度も見られず，投資目的と市場の拡大という現実的な興味以外は，新しい体暇先ができた程度の無関心さであった．

このような状況下で東部ドイツでは戸惑いや将来に対する不安や絶望・不満が，反動的に旧社会主義体制下の社会の連帯感，安定感を求める声にも繋がり，それはオスタルギー（Ostalgie）という言葉に顕著に表現されている．旧東ドイツの支配政党である社会主義統一党（SED）の後身である民主社会党 PDS は，10月の議会選挙では得票数4.4%と躍進し30の議席数を得ている[1]．

一方西部ドイツにおいては，余りにも急速な統一のテンポとそれに伴い国家予算の中で際限なく膨れ上がる統一コスト[2]，その個人的な負担，「増税無き統一」という政府の公約に反した増税，高い失業率[3]などが，西部ドイツ市民の不満となっている．また外国人に対する極右勢力の暴力，テロ行為や，80年代後半より深刻さを増し始めた新しい貧困の出現は，社会の危機感を生んでいる．

このような困難に直面している統一ドイツ社会の危機感をさらに深刻なものにしているのは，統一ドイツとしてのアイデンティティの不在である．二つのドイツは一つになったが，東と西，持つものと持たざるもの，ドイツ人と外国人，若者世代，左翼知識人……統一後共同体として一つになったはずの社会の中には，皮肉にもたくさんの亀裂が入っているかのように見える．

2　戦後西ドイツのアイデンティティ

社会学者ノルベルト・エリーアス（Norbert Elias）は，ヒトラーが戦後西ドイツ社会に残した遺産として，東西ドイツ分裂と同じく後に深刻な影

響を及ぼすものである「アイデンティティの危機」を挙げている[4]．敗戦によって決定的な打撃を受けたドイツは廃虚の中まさしくゼロからの復興をしなければならなかった．その新しい飛躍を可能にするためにアデナウアー政権は市民に国家社会主義の時代は終結したが，ドイツという国の基盤には何の変化も起こらなかったかのように印象づけることに成功した．このため初期においてはドイツ人の間では一つの国家が分断されたという事実の認識度は低く，統一は将来実現されなければならない当然の事のように受け止められていた．1952年4月3日の連邦議会でも「自由なヨーロッパの中でのドイツの再統一の実現」を政治の最優先課題にすることが明確に宣言されている[5]．この統一への確信はしかし年と共に非現実なものとなっていく．1951年には西ドイツ国民の39％が統一が実現されるという考えを持っていたが，1987年には同様の考えを持った市民は僅か3％であった[6]．

確かに敗戦直後には西ドイツ市民の意識には国家社会主義が引き起こした罪とそれによる罰への恐怖があり，アメリカ・イギリス・フランスの戦勝国側は二度と再びドイツが強い国になるのを避けるために，ドイツ人を再教育しあらゆる権力・国力を放棄させた．そしてナチイデオロギーの痕跡はことごとく消され，ヒトラー政権に加担した者の罪の追求・捜査には容赦が無かった．しかし早くも1947年の夏にはこの戦勝国側の姿勢は忘れられることとなる．というのは第二次世界対戦中は共通の敵と戦うことにより表面に表れることの無かった共産主義ソヴィエトと資本主義アメリカという対立関係が戦争終結後，東西冷戦という形で再び現実化し，ドイツ，そして分断された都市ベルリンは東西問題の焦点として，世界政治の極めて重要なテーマとなるのである[7]．

このような状況のもとで西側諸国にとって，東のソビエト支配地区と向き合うドイツの西側ゾーンを早い時期に強化することは必然事項となり，そのために西ドイツ社会や産業界において，かつての第三帝国での権力構造が再構築されることとなる．それは官僚・司法・警察の分野にまで及び，ナチ政権に協力・加担した過去を持つ多くの人材が，ドイツの迅速な復興のために再び登用された[8]．また戦争の傷を負った国民も廃虚の中，迫り来る生存の危機感の中でその運命を，抵抗もなく新たにかつて

の指導者達に委ねたのである．何よりもまず復興すること，物質的に人間らしい生活が保証されるようになること，これが全てに優先する課題だったことは想像に難くない．このような復興優先，経済優先の政策はしかし西ドイツ社会にとって後に「取り返しのつかない傷跡」（エリーアス）を残すことになる．それはアイデンティティの危機であり，ドイツ連邦共和国の指針，価値観，国家の意義といったことに関しての混迷した状態（Desorientierung）である[9]．

西ドイツがナチスの過去の罪と対決すること無く敗戦の生活の困窮から脱した頃，新しい世代が生まれてくる．国家意識を持たない左翼的な思想を帯びた世代である．彼らはヒトラーとナチス，そしてドイツが犯した罪，「20世紀半ばにおいて誰にも可能と思われなかった陰惨な蛮行への逆戻り」（ヨシュカ・フィッシャー，Joschka Fischer）[10]を意識し始める．その結果として彼らの意識の中には国家的なもの全てに対する本能的な拒絶感が形成され，それは政治的，文化的なカテゴリーにまで発展するのである．ナチスは国家と国家意識に係わるもの全てをその残虐非道な犯罪と同一化していった．文字どおり「ドイツ国民の名において」という宣告文によって多くの人々が裁かれ，処刑されたのはこの事実を如実に表している．政府は戦後連邦補償法によってナチスの迫害による犠牲者に賠償金を支払ってきたが，このナチ問題は戦後西ドイツで政治的・感情的に克服されないままになってわだかまっていた．エリーアスは戦後西ドイツにおいて幾度となく社会的なテーマとして話題になってきた「過去の克服」が実際には決して実現されてはいないことを指摘し，それに言及することはドイツ人の「われわれ意識」（Wir-Bewußtsein）という生傷に触れることだと述べている[11]．それ故にこの新しい左翼的な世代は自己と国家，ひいては自己とドイツの過去が結びつくことを極度に避け，自己のアイデンティティを国外，第三世界での政治問題への興味と連帯に求めていった．68年世代のマルキシズムへの傾倒も，ドイツの過去からの自己の解放への欲望と関連していると言えるだろう．国家という概念は過去の犯罪を思い起こさせ，依然として危険なものであり，ナチスの犯罪を嫌悪しながらも国家と自己との係わりから目を逸らせたい，あるいは国家という存在さえも忘れてしまいたいという願望は，その世代の多くのものが共有するイデオ

ロギーが国という枠を超えたものであったことにも表れている．国家・民族，そしてその過去から離反した彼らの意識は積極的にさらに国家を超越したもの，環境へと向けられていった．特に80年代前半から西ドイツではヨーロッパ諸国の中でも際だって環境への意識が高まり，ひいては環境保護が確固として政治問題になり得る文化の土壌が築かれ，緑の党という政党結成にまで発展していった．68年以降の世代に属する西ドイツ人の多くが共通して育んできた精神的土壌，つまり反戦，第三世界から搾取し自然を破壊しながら成長していく産業界やそれに迎合する経済優先の政治風土と対決する態度，地球規模での環境保護の精神など……これらは国家やナチスの過去とは無関係の理念であり，どこの国の誰からも非難されることのない正当性を持ち，今や戦後奇跡の復興を遂げた経済大国西ドイツの新しい世代は，ある種のアイデンティティ，行動の拠り所となる支柱を得たかに見えた．東西ドイツが分断され，西ドイツが「ボン共和国」という害の無い言葉で形容され，その過去ゆえに世界の武力衝突の紛争解決の介入を免れていた間は．

イーリング・フェッチャー（Iring Fetscher）は既に70年代の終わりに国家に対して新しい関係を発見し，躊躇することなくドイツ民族に対する愛情とその民族の性質に対する誇りを語り始めた左翼の存在を認めているが[12]，戦後西ドイツの精神風土を決定してきた左翼知識人の亀裂は，統一後91年の湾岸戦争時の反戦運動の展開において表面化することになった[13]．

3　戦後東ドイツのアイデンティティ

西ドイツがその早期復興のために，ナチスドイツに協力してその機構の重要なポストを担っていた人材を利用し，戦前と類似した権力構造を築き上げていったのに対し，東ドイツでほぼ完璧な非ナチ化の原則のもとに国家が築かれ，東ドイツ政府が描いた構図は以下のようなものであった．西ドイツ，つまりドイツ連邦共和国のみがナチスの過去を継続して引き継ぐ存在であり，これに反して東ドイツは，ナチスドイツによって引き起こされた戦争に敗北した後，ソ連軍によって解放され，ナチスに迫害された社会主義思想を持った市民によって建設された全く新しい国家であり，ナチスの罪とは無関係である…….

1945年以降ナチ関係者達の西側への流出により，いわゆる「素人」によって国を建設することを余儀なくされた東ドイツの指導者層は，汚点を持たない労働者階級，小市民階級出身者達，ナチス支配の時代に強制収容所に入れられていたり，あるいは亡命からドイツに帰った人々から成っていた．従って彼らには加害者意識は希薄であり，当然のこととしてイスラエルへの補償も拒否してきたが，他方ソ連に対して莫大な賠償金が払われることになる[14]．1945年のドイツの無条件降伏はファシズムからの解放であり，それは今や東ドイツの保護供与国（Schutzmacht）であるソビエト連邦に負うものであるという考えがその後のソビエト連邦との関係の根本にあり，ソ連への莫大な賠償金の支払は敗戦直後の東ドイツに重くのしかかって，その復興を極めて困難なものにしたのである．

西ドイツではアデナウアー政権に始まった経済復興が身を結び，OECD（経済協力開発機構），後にヨーロッパ共同体に参加し経済大国への道を歩んでいくが，東ドイツもまたCOMECON（経済相互援助評議会）の中で，東の経済ブロックにおける経済の優等生として西ドイツの位置に相当する発展をしていくことになる．東ドイツでは失業もホームレスも無く，福祉の保障体制も整備された社会が築かれ，教育水準・生活水準の点でも西ドイツのそれには下回りはしても，世界水準の上位にあった．

この社会主義経済の業績として，生活が保障され，守られているという安定感は確かに存在し，東ドイツの市民達は国家に対する独自の感情を育てていった．SEDによる絶対支配体制とは区別された，自分達がゼロから築いた新しい国家と一体化した意識，アイデンティティを育んでいったのである．特に東ドイツの都市が戦争で西側よりもさらに大きなダメージを受け，マーシャルプランによるアメリカからの援助[15]を受けた西ドイツとは異なり，ソ連への賠償金として1953年までに総額665億マルクを支払い[16]，加えて知識階級・技術者達がソ連，あるいは西ドイツへ流出した苦渋に満ちた復興期を考えても，東ドイツ市民の連帯感，国家との一体感が西ドイツ市民のそれよりもさらに強いものであったことは想像される．統一された今，東部ドイツの人達が西ドイツになくかつての東ドイツの社会が持っていた肯定的な資質として挙げるのは連帯感（Solidarität）・安心感（Geborgenheit）といったものである．

しかし市民の間の連帯感とは裏腹に，政権の安定を図るためにますます厳格な監視体制を敷く政府の指導者達と市民の考え方の溝はまもなく広がってくる．この政府に対する不信は早くも敗戦から8年を経過した1953年6月17日の労働者の暴動となって表れた．この時労働者の代表機関が政府に突きつけた要求書には，現政府の解散，労働者達による新行政機関の設立や，西側との間を隔てる境界の撤去など民主化への要求が列挙されている[17]．この暴動を武力鎮圧した政府は，61年には壁の建設という強硬手段に出ることになる．

アイデンティティ形成の試みは政府の側からも成された．SED 政府は「外」と遮断することにより，また「他者」,「異なる者」に対する敵対感を作ることによって東ドイツのアイデンティティを確立し，国家をまとめようとしたのである．ヴォルフガング・ティールゼ(Wolfgang Thierse)は，この政府によるアイデンティティ形成の際に，経済や社会のプロセスの多様性が故意に簡略化され図式化された 世界像が仲介されて，「世界」と「私」,「善」と「悪」などに関して単純化された解釈がなされるようになったこと，その結果として東ドイツ市民に複雑な利害関係が絡んだ葛藤を克服する能力が欠如する傾向があることを指摘している[18]．

このように東ドイツのアイデンティティは，運命共同体としての市民の連帯感と政府によって作られた世界観の上に存在していた．

4　新しい貧困の出現

貧困問題と社会の中の貧富の差の拡大は西ドイツにおいてもすでに80年代後半から深刻に論じられてきたが，統一によってさらに新たな局面を迎えることとなった．特に東部ドイツでは従来の就労システムが破壊され生活の基盤が崩れたことが，東部ドイツ市民の中に大きな不安とフラストレーションを産んでいる．この状態が一体いつまで続くのか．西部ドイツの政治家は楽観的な見通しを繰り返し印象づけようとしているが，信頼のおける予想では東部ドイツが西に適合することができるのは最低10年かかるとされている．勿論その適合が100パーセント可能と断言することは不可能であり，最悪の場合は東部がドイツのより貧しい地域として将来ずっと留まることである．(これはあくまでも西と比較してのことである.)

東部ドイツ市民の不安といらだちのもう一つの原因は，市場経済が導入されたことにより単一性を持った社会の経済構造が崩壊し，貧富の差，生活水準の分裂が起きたことである．そしてその経済力の分散のしかたは西部ドイツのパターンを示してきている．東の経済復興が進むにつれて，何らかの形でその利益を被り生活水準を向上させることができた人々の数は過半数を占めるが，かなりの数の人々がそのグループの外側に属したままで，その時間が長くなれば長くなるほど物質的・精神的窮地に追いやられることになるのが現状である[19]．

西部ドイツでは90年代初頭からの構造不況の影響を受けて，特に船舶・炭坑・自動車・鉄鋼・航空機産業での失業率の増加やリストラが深刻な問題として浮上してくるが，一方東部では統一の翌年の91年には旧東ドイツに存在していた労働システム全体が崩壊したため，非常に広い層にわたる14パーセントという高い失業率となっている．しかし時間が経過するとともに失業問題を抱えた層が，西部ドイツのパターンと類似してくる[20]．つまり学業を終えたばかりの若者・未婚の母・老年層・身体障害者などに高い失業率が見られるようになり，その問題を抱えたグループが定着，徐徐に固定化されようとしている．特に若年層の失業問題は現在ヨーロッパの国々が抱えるネオナショナリズムの問題とも係わって，社会の中の「他者」，「弱者」に現在直面している危機の原因を認め，暴力行為という極端な形で現れ出た数々の事件は，現在ドイツの重要な内政問題の一つとなっている．

5　新しい世代

西ドイツでは国家意識を持たない世代，学生運動を経験し，左翼的な思想を帯びた68年以降の世代がその後社会の中で職業を持ち，子供達を育て，教師となって後の世代の教育に携わることによって，当時芽生えた思想的な伝統が市民の中の比較的知的な事柄に目覚めたグループによって受け継がれていった．左翼的影響を受けた思想，国外の出来事への興味，特に市民運動，第三世界との連帯意識，徹底した反戦意識，そして後に市民の多くの層にまで広がっていった環境保護の精神などは西ドイツの68年以降の文化に顕著に観察される理想であり，若者世代の思想を代弁するスロ

ーガンでもあった．彼らの思想は歴史と断絶しているが故に，数々の社会学者・歴史学者・ジャーナリストたちにアイデンティティ喪失の世代という非難を受けながら，彼らは戦後西ドイツの一定期間，単に若者文化と呼ばれるもの以上の，ある種のアイデンティティを築き上げようとしていたと言えるだろう．

90年代になり新しいタイプの若者像が社会の注目を集めるようになる．94年にシュピーゲル誌が行った14歳から29歳までの若者世代を対象にした意識調査[21]では，彼らは国家に対して中立的あるいは無関心な感情を持ち，現在の社会の形態と民主主義に対しては肯定的であり，マスメディアでセンセーショナルに取り上げられる極右勢力に対しては大部分の若者が拒絶している．そして国家に対する無関心な感情を持ちながらも半数以上の若者が国内で起こっていることに対して責任を感じている．また彼らの中の80年代から引き続き受け継がれてきた地球規模での環境意識・人権意識は依然として高い．その一方半数近くの若者がドイツ人としての優越感を持っている．ドイツが統一直後と比較してより良い状態だという印象を持っているのは僅か16パーセントだが，環境や社会を改善するために自ら行動を起こす考えはなく，16歳から30歳までの若者の56パーセントが人生の目的として自己実現を挙げている．文化の分野でもその嗜好は非常に多元化，多様化している．彼らの中にあるのは漠然とした危機感・孤独感であり，70年代の若者が持っていた連帯意識，体制や上の世代に対する反抗，反逆の精神は観察されない．

彼らの明確なイメージは摑みにくい．見えてくるのは非常に多様化し，その多様性の中で各々が自己実現にしか興味を持たない，連帯する能力を持たない若者像である．CDU/CSU（キリスト教民主同盟），FDP（自由民主党）のここ10年の若年層の党員数は3分の1以下に減少し[22]，91年以来ドイツ総連DGBも約150万人の組合員を失っている[23]．ジェネレーションXと呼ばれ，その時代の若者という役目を果たすことすら拒否した若者像，虚無と自己実現の欲求とが混じり合った若者像が，やはり統一ドイツの若者にも影を落としている．

このジェネレーションXという名を与えられた若者のタイプと平行して存在するのが，高学歴で経済力に恵まれたいわゆるヤッピー層である．彼

らもまた70年代，80年代の西ドイツの若者文化の伝統である環境問題・社会正義・人権・国際情勢に対する意識は高いがそれらと積極的に係わり合うことはなく，共感を持った傍観者である．社会や共同体に対する消極的な態度とは逆に，彼らの中には自己実現，どのように自己の人生をデザインしていくかということに関しての明白かつ貪欲な欲求があり，またその欲求は何においても優先する課題である．この自己実現には仕事だけでなく，余暇・経済力・ライフスタイル全てが含まれる．それ故連帯意識は極めて希薄で，高い向上心を持つが故に自己の人生のプランを他者の影響下に置いたり，あるいは他者と人間の根元的な部分で何かを共有することに関しては不能である．

68年世代の若者は自己のアイデンティティを過去と断絶させ，国家と切り放し，その外に連帯を求めたが，この若者達は情報の洪水に囲まれ回りの状況を的確に把握しながらも，どこにも連帯を求めない．彼らにとって守るべきは成功を収め成長していく，あるいはその可能性を持った自己という城であり，そこが彼らの個人としてのアイデンティティが存在する場でもある．

このような価値観を生んだ背景にはやはり，社会主義崩壊による世界の構造の変化，不況，ドイツ統一後の国内の混乱と社会の中のさまざまな亀裂，そして幾多の不協和音と不確実要素を抱えたヨーロッパ連合という課題などが考えられる．この大きな価値観の崩壊と情報量は豊富だが出口の見えない時代の中で，最も確実な方策として彼らは何物にも左右されない最小の単位である自己を選んだのではないだろうか．

6　統一ドイツの社会の課題
——新たなアイデンティティの模索

統一後のドイツに存在する危機感は，東部と西部，持てる者と持たざる者，社会と連帯することを拒否した世代やグループ，ドイツ人，非ドイツ人など，社会に入ったさまざまな亀裂に起因する．政治的統合，物質的統合だけではその社会が危機に対して脆いことを知っているからである．

今年（1994年）ドイツ連邦議会が召集されるに当たって，２人の政治家が開会の辞を述べた．連邦議会議長リタ・ズュースムート（Rita Süss-

muth）と最高齢議員のシュテファン・ハイム（Stefan Heym）である．２人ともその演説の中でドイツ国民の連帯意識の必要性を説いている．またヘルムート・シュミット（Helmut Schmidt）は東部，西部双方のドイツ人による「ドイツ国家基金」（Deutsche Nationalstiftung）の設立を提案している．これは「公の場での議論によって全ての州のドイツ人に共通の歴史的文化的なアイデンティティを自覚させ，ドイツが全ヨーロッパのモザイク的文化に寄与すること，そしてこのモザイクの一員となることによってドイツ国民に実りがもたらされるという意識を高める」[24] ことを目的としたもので，出身地を問わず全国から構成者を求め，全ドイツ人にとっての文化的財産であるワイマールにその本部を置く．シュミットはまた東部・西部ドイツ人の共通のアイデンティティ形成の鍵として，ブランデンブルク門やワイマールなど共通のシンボルを提案している[25]．

アイデンティティがその社会を構成する人々が共有する経験，歴史や文化に基づいていることは言うまでもない．そしてほとんどの場合，それは民族国家という概念のもと民族のアイデンティティとして論じられてきた．それ故戦後西ドイツ市民のアイデンティティはナチスが犯した罪とそれに対する償いの意識の継続的かつ決定的な影響下にあり，この償いと警告の意志はさらに次の世代へと受け継がれて行くべきものとして受け止められている．しかし戦後45年間ドイツの過去に対して異なった意識を持ち，異なった問題意識を持った旧東ドイツと統合し一つの国家を形成するようになった現在，シュミットのように共通したアイデンティティの鍵を第三帝国以前の歴史や文化，あるいはドイツ民族の悲願であった統一の象徴とも言われるべきブランデンブルク門に求めるのは理解できる．確かに東と西の間に「心の壁」（innere Mauer）が依然として存在し，東部ドイツの完全な統合（Integration）は政治の当面の主要課題である．しかし現在のドイツ社会は単に東と西というより，さらに複雑なグループに分かれている．統一後の過渡期が過ぎ何年かが経過した後で，ドイツ民族の歴史や経験に基づいたドイツ人のアイデンティティを確立することは可能であり，かつ必要なことであろう．だが現在ドイツには500万人を超すトルコ人，旧ユーゴスラビア出身者，イタリア人など外国人労働者がその家族とともに生活しており，それは平均すると人口の約７パーセントに当たる

が，都市部では外国人住民数が20パーセントを超えるところもある[26]．そしてその中ではすでにドイツで生まれた2世代目の子供達が育ってきているのが現状である．出生率が低下し人口の老齢化が進みつつある福祉大国ドイツにとって今や外国人労働力は必要不可欠の存在であり，さらにEC統合が軌道に乗り労働力の移動が今までより活発になることを考えると，ドイツ社会の外国人労働者，定住外国人の存在を無視して，ドイツ人だけのアイデンティティを確立しても根本的な問題の解決にはならないのではないだろうか．1980年以降外国人問題が深刻さを増すにつれてハイナー・ガイスラー（Heiner Geißler）はじめ派閥を超えた多くの政治家や知識人から外国人との共生を図るために，「多文化社会」（multikulturelle Gesellschaft）の構想が提案されているが[27]，これは定住外国人が文化的独立を保ちつつドイツ人と共存していくことが可能な社会への移行を，目的としたものである．しかし必要なのはこの「多文化社会」をまとめていく社会としてのアイデンティティである．

東部ドイツ人，西部ドイツ人，非ドイツ人，豊かな者，貧しい者，新しい世代……現在のドイツ社会の中の亀裂を埋めることができるのは，ドイツ人のアイデンティティと平行して存在することが可能な社会の構成員全体を包括するアイデンティティである．一つの可能性としてそれは特定の民族のアイデンティティのように過去を向いたものではなく，未来に向けられたもの，ドイツ社会がそれに向かってこれから進んで行くべき理想，指針のようなものとなるであろう．今必要なのはアイデンティティという概念そのものに関しての発想の転換ではないだろうか．

エリーアスは1977年にドイツ社会の中の分裂の危機を認め[28]，今後のドイツ社会の，ドイツばかりでなく国際化された開かれた社会のアイデンティティに関して有用な示唆をしている．最後にこれを引用したい．

> どの国もその将来は若い世代の善への意志や彼らの帰属性に依存している．国家の建設は何よりもまずその若い世代にこの社会はその中で暮らし，生きていくだけの価値があるという気持ちを起こさせることを課題とするのである[29]．

注

1 朝日新聞，1994年10月17日朝刊

2 「ドイツ統一基金」は1994年まで1,150億マルクとされていたが，次々に予算修正が加えられ1991年度の統一関係の予算だけで900億マルクが割り当てられた．坪郷實『統一ドイツのゆくえ』1993年　岩波書店　157ページ以下参照.

3 西部ドイツの1992年の失業率は5.8％である．Vgl. Deutscher Gewerkschaftsbund und Paritätischer Wohlfahrtsverband (Hrg.), *Armut in Deutschland,* Reinbeck bei Hamburg 1994. S. 152.

4 Norbert Elias, *Studien über die Deutschen,* Frankfurt am Main 1994, S. 521 f.

5 Peter Longerich (Hrg.), *Was ist der Deutschen Vaterland?.* München 1990, S. 195.

6 Silke Jansen, *Meinungsbilder zur deutschen Frage,* Frankfurt am Main 1990, S. 95.

7 Bernt Engelmann, *Deutschland Report,* Göttingen 1994, S. 15.

8 *Ibid.,* S. 15 f.

9 Elias, a. a. O., S. 522.

10 Joschka Fischer, *Die Linke nach dem Sozialismus,* Hamburg 1993, S 17.

11 Elias, a. a. O., S. 547.

12 Iring Fetscher, *Die Suche nach der nationalen Identität.* In: Jürgen Habermas (Hrg.), *Stichworte zur geistigen Situation der Zeit,* Frankfurt am Main 1979, S. 116.

13 左翼知識人の間に，「ミュンヘン会談」の過ちを繰り返さないため，またイスラエルとの連帯のために，イラクに対しての連合軍の参戦を指示するグループと，それまでの思想的立場である反戦主義を唱えるグループへの分裂が認められた。

14 Engelmann, a. a. O., S.31.

15 *Ibid.,* S. 31 f.

16 Engelmann, a. a. O., S. 31.

17 Longerich (Hrg.), a. a. O., S. 197 f.

18 Wolfgang Tierse. *Von den Ursachen rechtsextremer Jugendgewalt in Ostdeutschland.* In: Wilhelm von Sternberg. (Hrg.) *Für eine zivile*

Republik, Frankfurt am Main 19992. S. 187.

19 Deutscher Gewerkschaftsbund und Paritätischer Wohlfahrtsverband (Hrg.), a. a. O., S. 34.

20 *Ibid.,* S. 35.

21 Der Spiegel 38/1994, S. 65f.

22 Spiegel Special November/1994, S. 58.

23 Der Spiegel 22/1994, S. 59.

24 Helmut Schmidt, *Handeln für Deutschland,* Hamburg 1994, S. 182 f.

25 *Ibid.,* S. 187.

26 ディーター・ボルン他訳, ドイツ連邦共和国政府編, 『ドイツの現状』フランクフルト・アム・マイン 1992年. 11ページ参照.

27 von Sternberg (Hrg.), a. a. O., S. 95f.

28 Elias, a. a. O., S. 519 f.

Identitätsprobleme des Vereinten Deutschlands

——Aufgaben der gespaltenen Gesellschaft——

Hiroko SATOH

Fünf Jahre nach dem Fall der Mauer treten im Vereinten Deutschland viele innenpolitische Probleme zutage und die erwünschte Integration Ostdeutschlands scheint noch bei weitem nicht realisiert zu sein. Man spricht von „Ostalgie", oder von der „inneren Mauer". Die bundesdeutsche Gesellschaft erscheint gespaltener denn je, so daß jeder sich fragt: „Was soll aus Deuschland werden?" Hinter dieser Krisenstimmung und Verunsicherung steckt ein tiefes Identitätsproblem, das mit den sozialpolitischen Problemen zusammenhängt und deren Lösung und die Integration des Ostteils schwieriger macht. Dieser Aufsatz behandelt das Identitätsbewußtsein der Deutschen im Zusammenhang mit seiner Entwicklung in den zwei Deutschland nach dem Krieg und mit den gegenwärtigen gesellschaftlichen Problemen in Deutschland.

In Westdeutschland wurde bereits in den frühen Jahren der Nachkriegszeit die Vergangenheit und die Schuld der Nation verdrängt, während sich die Adenauer-Regierung auf den Wiederaufbau der Nation konzentrierte, was auch den Interessen der Siegermächte entsprach. Unter diesen Umständen wurde altes Fachpersonal aus der Nazi-Zeit wieder in Führungsschichten eingesezt. Die nachfolgenden jüngen Generationen, denen die Schuld der Nazidiktatur und der Deutschen bewußt wurden, lehnten alles Nationale ab, und suchten ihre Identität außerhalb Deutschlands, in der Solidarität mit Bürgerbewegungen im Ausland, Antikriegsbewegung oder Umweltbewegung, was für die geistige Situation Westdeutschlands seit den siebziger Jahren

richtungsgebend wirkte.

In Ostdeutschland bemühte sich die SED-Regierung, eine völlig neue sozialistische Nation frei von der Nazi-Vergangenheit aufzubauen, indem sie versuchte, eine einheitliche Gesellschaft zu schaffen und ihren Bürgern ein eindeutiges Identitätsgefühl zu geben. Obwohl bald eine Kluft zwischen der Regierung und den DDR-Bürgern entstand, die dann als Arbeiteraufstand 1953 zutage trat, war die Gesellschaft im Vergleich zu kapitalistischen Ländern einheitlich und das Gefühl der Zusammengehörigkeit der Bürger wuchs. Dabei spielte jedoch der Versuch der Regierung eine wichtige Rolle, mit Hilfe der Abgrenzung nach außen und mit einem simplifizierenden Weltbild eine Identität zu erzeugen.

In der Bundesrepublik wurde bereits seit Anfang der achtziger Jahre die Armutsfrage als zentrales sozialpolitisches Problem diskutiert. Sie bekam durch die Wiedervereinigung eine neue Qualität, weil zwei Gesellschaften mit ungleichem Entwicklungsstand entstanden. Der Zusammenbruch des Beschäftigungssystems, Auflösung der bisher relativ homogenen Sozialstruktur und Auftreten der Arbeitslosigkeit verursachten bei vielen Bürgern der neuen Bundesländer eine tiefgreifende Verunsicherung und Irritation.

Seit Anfang der neunziger Jahren ist ein neues Bild der Jugend zu beobachten. Sie sind unfähig, sich zu binden, haben viel Wissen über den Zustand der Welt, aber keinen Willen zur Beteiligung an gemeinsamen Aktivitäten. Die Selbstverwirklichung ist das Lebensziel der meisten von ihnen.

Wegen dieser Gespaltenheit der Gesellschaft herrscht im Vereinten Deutschland eine gewisse Krisenstimmung und Irritation, so daß in der Öffentlichkeit viele Diskussionen über deutsche Identität geführt werden. Die Stiftung einer neuen gemeinsamen deutschen Identität und die Integration der neuen Bundesländer

sind in der Zukunft wohl möglich. Das alleine bedeutet nicht die grundlegende Lösung der Probleme sowohl in der Gegenwart als auch in der Zukunft. Außerdem wird es nämlich wegen des gemeinsamen Europas immer wichtiger, eine Möglichkeit zum Zusammenleben mit den ausländischen Bewohnern in der deutschen Gesellschaft zu suchen, die bereits sieben Prozent der Bevölkerung entsprechen. Somit wird es dringend nötig sein, neben der Identität der Deutschen und den Identitäten der einzelnen Kulturgruppen eine neue Identität der deutschen Gesellschaft, die alle Mitbewohner umfaßt, zu erzeugen. Diese wird mit den Idealen der Gesellschaft zusammenhängen. Der Versuch könnte der Schlüssel für die Möglichkeit des gemeinsamen Europas und gleichzeitig der Beitrag Dentschlands für die Zukunft sein.